



◇ 学校運営方針の説明 （ 大塚 優 校長 ）

○1 年生 24 名入学。全校生徒 159 名

○昨年度、横山小の子どもたちが変化の大きい時代へ対応していけるように、また、不利にならないように教育課程の見直しを行った。（都市部との差が生じないように）

○急速な AI の進歩は仕事の大半を奪うことになる。そのような中で、人としてどのような能力を磨いたらよいのか、考える、判断する、コミュニケーションをする力を高めたいと考えた。

○総合的な学習の時間を中心に、日本中で育ててられる“探究の子”。学校間の温度差がとても大きく、子どもの能力に大きな差が生じてくることが心配される。調べる力、プレゼンする力、人とかかわる力などであり、「能力」は「学力」より数段身に付きにくい。

○カリキュラム・マネジメントとしての手立て

※カリキュラムとは「教育課程」を意味する。教育課程とは、1 年間の授業のカリキュラムであり、授業そのものである。マネジメントとは、目的を共有化して PDCA のサイクルで評価・改善すること。つまり、カリキュラム・マネジメントの目的は、教職員全員で“つきたい力”を共有し、授業中心の学校づくりを行うことである。

①「対話する力」を学校としてつきたい力に設定し、あらゆる教育活動を「対話する力」の育成の観点で見つめなおす。

②探究のプロセスである「課題設定→情報収集→整理分析→まとめ・表現」に従い授業をつかっていく。特に山形県の弱いとされる「整理分析→まとめ・表現」に努めたい。表現においては、YouTube「よこちゃんねる」の活用を推進していきたい。

② 探究学習を進めていくうえで配慮しなければならないこととして、「個別最適な学び」と「協同的な学び」である。子どもたちによる「学び合い」を授業に位置づけ、子どもたちの議論で課題が解決される授業をめざしていく。

④学校行事から総合的な学習の時間への移行を進める。大人がお膳立てしない授業。子どもたちの関心や課題に合わせて学習が計画され、展開されていくように仕向ける。昨年は、熱中症の危険から学校行事を延期したり、中止したりしたので、行事の時期をずらしたり配慮した。

○3 年生と 6 年生は、地域の泉蔵寺さんに大変お世話になっている。3 年生の地域学習。6 年生は歴史学習で横山城やお祭りについて学ぶ。担任団も取材に訪れいろいろ教えていただいた。今、計画を立て進めている。

○4 年生は、三川町社会福祉協議会と連携し、こばえちゃ広場等での交流を計画中である。

○5 年生の農業体験学習では、1 年間で農業の課題と未来についてドキュメンタリー風にまとめていくことを予定している。先日は最新の農業機械を見せていただいた。

○学び合うことは時間がかかるがしっかりした学びの素地をつくることのできる。素地ができれば学力の向上につながる。

○今年度の目玉としての「横山ブランディング戦略」ウェルビーイングと対話する力。

ウェルビーイングとは

身体的・精神的・社会的に良い状態にあること。短期的な幸福のみならず将来にわたる持続的な幸福を含むとともに、個人だけでなく、地域、社会が幸せや豊かさを感じられる良い状態にあることも含む包括的な概念。（山形県第7次教育振興基本計画目標より）

- ① 子どもたちにとっては自分の学校、家族、地域を自慢できる状態になっていること。
みんなユ－チューバーという“やりがい”（誇り）をもてるようにする。本当に自慢できるのは、がんばった自分。高まったスキル。取材で出会った人、コト、モノ。
- ② 先生方も相当がんばっている。もっと誇りに思っている。
- ③ 横山サミットの開催。PTAよこやまサミット（6月）地域よこやまサミット（10月）。

◇ 学校運営方針への質問と意見 （各委員の方より）

- ・ 児童の自主的、主体的なところに委ねる場合、どうしても個人差と対話が苦手な子がでてくると思う。教員の方は個に配慮しながらアプローチしてくれると思うが、どのような対応を行っていくのか。探究で特化した場合に、どの子にどのような可能性があるのかはわからないので、提供する情報はより多くなると思う。どのような情報の提供を行っていくのか知りたい。
- 当然である。高学年でみんなで話し合いを行っていても数名が中心の状況が見られる。一人ひとりが何を考えているか教員がわからないではいけないので、授業の終末、ノートに自分の考えをふり返り、まとめる時間を大事にしている。また全員の中で対話ができなくとも、小集団（グループ）の中ではできる。それを繰り返しながらスキルを身に付けていきたい。課題が決められない児童には、ポイントポイントで立ち止まり教員が支えていく。

◎ 学校運営方針については承認をいただきました。

◇ 熟議テーマ 「地域（ふるさと）へ思いを寄せるこどもの育成」に関わって

- ・ 近所に子どもがいれば学校との関わりがなにかしらわかる。いないとかかわりが極端に減る。
- ・ 自分が小学校の頃、下校で歩いてくると地域の方からの声かけがあった。「おめえ、どこの子だよ？」と訪ねられた。祖父母は、悪いことをすれば地域の子どもとして叱っていた。今になってみれば、地域のこゝろ屋号などもわかるきっかけになった。
- ・ いまだに屋号が使われている地域もある。地域の子どもとして大きな声を出し注意をだすこともある。町内会にどんな子がいるかを理解することは大事だと感じている。
- ・ 三川町の生まれではない。外から加わった者としては、地域の行事や隣近所がわからない人も多くいることを知ってほしい。
- ・ 自分がいる場所を好きになればなるほどほっとする。人も同じで知り合いが多くなればなるほどほっとすると思う。